



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 貧困の再概念化                                                                           |
| Author(s)        | リスター, ルース                                                                         |
| Citation         | 教育福祉研究, 17, 1-8                                                                   |
| Issue Date       | 2011-11-01                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/47421">https://hdl.handle.net/2115/47421</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | RISUTA-1.pdf                                                                      |



## 貧困の再概念化

ルース・リスター

### はじめに

札幌にご招待いただき、ありがとうございます。ここに來られたことを本当に嬉しく思っています。今回は二回目の來日で、東京以外の場所に來たのは初めてです。本日これからお話しする内容は、2004年に刊行した著書『Poverty』を基にしていますが、本書は松本伊智朗先生の手でいまちょうど日本語への翻訳が完成したところです。今日の講義は大きく分けて3つの部分からなっています。最初の部分で、貧困の概念と定義と測定基準の違いをはっきりさせ、枠組みを作ります。定義と測定基準だけでなく、貧困を概念化することが重要だと考えているのですが、その理由は追ってご説明します。二つ目では、貧困を概念化するために生じる、構造と他に働きかける力（エージェンシー）という社会学的観点からの諸問題を論じます。最後に、貧困に関するさまざまな言説—言語や視覚的イメージとして、「貧者」がどのように描かれているかについて考えたいと思います。

### 枠組み

貧困に関する議論がしばしば混乱するのは、貧困の測定について論じているのか、定義を問題にしているのか、もっと広く貧困の概念を扱っているのかははっきりしないままに語り合われているためです。そこでわたしはまず、自分がこの3者をどのように区別しているかをご説明したいと思います。

概念という場合、それは意味と理解、言説とイメージのことです。これがわたしの話の焦点になります。概念が、定義と測定基準の枠組みになります。定義は概念よりは狭いものです。これは、

貧困である状態と貧困でない状態を区別できる指標でなければなりません。文献によって定義は数多く見受けられ、日本でどのような定義が一般に使われているのかは存じ上げませんが、わたしは生活水準の低さ、かつまたは物質的資源の不足、特に低所得によって社会への参加が困難になるといった物質的定義を取り上げます。これは言うまでもなく、故ピーター・タウンゼントの系譜を継ぐ貧困の相対的定義です。測定基準は、定義を運用可能にします。この二つはしばしば混同されます。そこでたとえば英国では、政府による貧困の公式定義が、所得中央値の六〇パーセントなどと言われるのですが、実際にはこの数字は測定基準です。測定基準があることで、政府は政策根拠となるデータを得ることができですが、これは日本政府が初めて発表した貧困統計を報じた JAPAN TIMES でも論じられていたことです。

このように、定義や測定基準などは非常に重要なものです。けれどもわたしは、概念の重要性を特に強調したいのです。というのも概念を無視すると、貧困がどのように経験され、理解されているかという視点を失ってしまうからです。そしてわたしがひとつ基本としているテーマは、貧困状態にある人々自身が貧困の意味についてどのような考えを持っているかに耳を傾けることの大切さです。つまり、貧困の概念化をしようとする際には、できうる限り経験に根ざしたものであるべきなのです。

わたし自身は、参加型の貧困調査事例や、国際的な反貧困・人権擁護団体 ATD4th ワールドが最貧困家庭を対象としている活動、さらに、「貧困・参加・力に関する委員会」(Commission on Poverty, Participation and Power=CoPPP)での自

分自身の活動経験などを踏まえて貧困を概念化してきました。

CoPPP は参加型の草の根的な相談援助活動から生まれました。委員の半数は実際に貧困経験のある「草の根相談員」で、残りの半数はわたしと同じような一般人です。これは非常に困難でやりがいのある仕事でした。たとえば一般相談員には、自分たちが貧困についてどれだけわかっているかという問いが付きつけられるのです。

ここに参加したことで、貧困が経済的に不利で不安定な状態であるばかりでなく、社会の中でいかに恥ずかしく、精神を蝕む体験であるかをよく理解することができました。具体的には、発言権をもたないこと、軽んじられること、辱められること、尊厳や自尊心を傷つけられること、恥と汚名、力を持たないこと、人権の否認と市民権の制限などで、今日と明日、詳しくお話ししたいと思います。

また、このように帰納的に貧困を考えるアプローチ—貧困状態にある人の経験から出発するアプローチ—を、認知に関するナンシー・フレイザーとアクセル・ホネットといった理論家の研究などを利用しながら、演繹的アプローチと結びつけました。この点に関しては明日、貧困の概念化がポリティクスと実践にどのような意味を持つかをお話しするとき、もう一度取り上げます。

演繹的アプローチをとるのは、貧困研究をより広い社会科学の枠組みの中に位置づけたいという狙いがあるからです。これは、えてして片隅に追いやりられがちな貧困にある人々の関心事を、広く政治や研究理論の議論の場に持ちこむためです。

### 構造とエージェンシー

そこでわたしは、自分の貧困の概念化を構造とエージェンシーの関係をめぐる議論の中に位置づけるため、たとえば社会科学文献を広く利用します。構造を中心に見ると、社会的、経済的、政治的システムやプロセスと、それらが貧困状態にある人々の生活や機会にどんな影響を与えるかに焦

点が置かれます。一方エージェンシーに焦点を当てると、そうしたシステムやプロセスのなかで個々人がどのように動き、決断するかが明らかになってきます。

構造とエージェンシーはそれぞれ異なる角度から貧困を説明する核心部分ですが、今お話ししたいのはそのことではありません（もっとも、貧困の原因を個人の行動に帰そうとする連立政権の誕生にともない、イギリスではいまこれが非常に抜きん出た話題になっています）。また、わたしはどちらかといえば構造よりエージェンシーに重点を置いてお話ししますが、これはエージェンシーのほうが重要であると考えているからではなく、少なくとも最近までは貧困の概念化においてエージェンシーが軽んじられていたからです。

### 構造

エージェンシーは、常に人々が生活を送っている構造の制約や機会の中に意味づけられるべきものです。階級格差や、ジェンダー、人種、障害、年齢といった社会的立場の違いなどが貧困を形作り、貧困と相互に作用して、貧困に対する個人の実感を左右します。

格差要因の最たるもののひとつがジェンダーです。貧困をジェンダーの視点から分析すると、男女間で生じる多くの不平等が明らかにされるだけでなく、貧困の原因、そして貧困の影響にジェンダーが濃く影を落としていることもわかります。女性の貧困の要因は、労働市場や行政の対応のみならず、家庭にも求められます。家庭内での労働がジェンダーによって割り振られると、女性が独立した収入を得る力に影響します。また、ジェンダー視点は、家庭内の個々人がそれぞれに貧困をどのように実感しているかを重要視します。それは家庭を分配の単位とみるからです。このように、調査によって家庭のなかで財が公平に共有されない場合に、隠された貧困や収奪のあることが明らかにされます。

これは子どもの貧困体験にも関わってきます。ただし子どもは往々にして、母親がいわば貧困の緩衝材となり、100 パーセントの衝撃を受けない

ように守られていることが、多くの国々において検証されています。とはいえ、テスト・リッジも述べているように、「子ども時代に貧困を経験することは、きわめて不穏で破壊的な影響を及ぼしうる」ものです。

### エージェンシー

家庭の内外において、さまざまな構造的制約を受けたとしても、貧困状況にある人々は人生においてさまざまなエージェンシーを駆使します。貧困状態にある人々のエージェンシーを認めることと、貧困を本人の責任だとすることとのあいだには、彼らが私たちと同じように失敗や「誤った」決断をしてしまうこともふくめて考えれば、紙一重の違いしかありません。貧困状態で生きている人々を責めることを躊躇するのは、ごく最近まで貧困の分析においてエージェンシーの問題が適切に扱われてこなかった証拠でもあります。

逆に、そこにはロマン主義化・理想化の危険があります。すべてのエージェンシーがその個人ないし他者にとって建設的なわけではありません。たとえば、エージェンシーが暴力行為を通じて表現される場合もあります。さらに、エージェンシーを理想化することの裏面性として、抑うつ的な心理状態などによってエージェンシーを行使できない人が、貧困状態にある他の人々よりいっそう大きな屈辱感を味わい、それによって失敗と恥辱の感覚を悪化させてしまうことにもなりかねないのです。

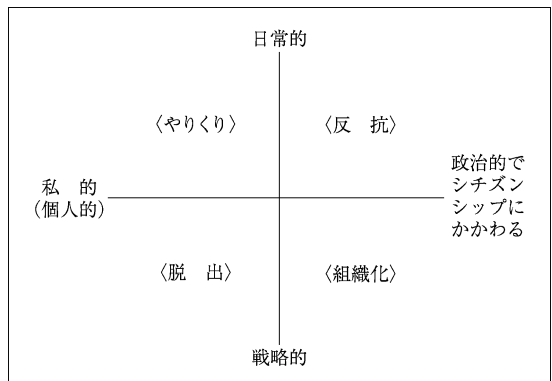
最も基本的には、エージェンシーとは行為する能力のことです。エージェンシーにはいくつかの種類があります。図中、垂直軸は「日常的」なエージェンシーと「戦略的」なエージェンシーの区別を表わし、人々の選択が生活にどのような戦略的意味合いをもたらすかに基づいて区分けされます。水平軸の一方の端は個人（広い意味で個人の暮らし向きに焦点を当てる）を、もう一方の端は政治やシティズンシップにかかわる行為を示し、抵抗ないし幅広い変化を実現しようとする試みを含みます。どちらの軸も二分法としてではなく、連続体として理解してください。またこの分類は

行為の分類であって行為者の分類ではありません。したがって、どの個人をとっても、その人が四つの領域にあるエージェンシー、すなわち「やりくり」「反抗」「脱出」「組織化」のすべてを行っているということもあり得ます。ではひとつひとつを見ていきます。

### 「やりくり」

貧困状態での〈やりくり〉は、日常的で個人的な領域に入ります。〈やりくり〉は安易に当然視されることが多く、エージェンシーの表れとしてはなかなか認識されません。生計 (livelihood) という枠組みはもともと国際開発の文脈で発展してきたもので（これについては明日もう少しお話しします）、「資源」の分配が不平等になると、負荷のかかる環境に対応するひとりひとりの能力に差が出ると考えます。「資源」は単に物質的な財だけではなく、個人の資源や社会的、文化的資源も含まれます。個人の資質とは能力や柔軟性であり、社会的資源とはネットワーク、文化的資源は人が自分の立場を意味付けるのを助けたり、〈やりくり〉をするために必要な情報を入手するすべを教えてくれたりするものです。ある研究者の表現を借りれば、それらが合わさって「生計を立てる過程で入手する必要のある資源」となります。

これは、貧困状態にある人がエージェンシーを用いる際の〈やりくり〉の方法に光をあてる助けとなります。〈対処〉ないし〈やりくり〉は、最低限のところでは、なんとか生活を切り盛りし、あれこれをつなぎあわせ、ないものはないで我慢す



図：エージェンシーの形式

るプロセスであり、そのような趣旨の調査結果が数多く積み上げられています。貧困研究の文献の多くは、日常的なやりくりについて、「戦略」という表現を使います。たとえば、「生き残り戦略」、「予算戦略」と言った具合で、よく併用される形容詞の主なもの、「複雑な」「革新的な」「高度な」などです。

ほとんどの家庭で、物質的資源が不十分なときに貧困を切り抜けるためのやりくりの重責を、自分たちの役割として担っているのは女性です。そのため女性は自身の個人的資源と、多くの場合は社会的資源を利用します。生き残るための闘いにおいて利用される個人的資源、すなわち回復力とやりくりの才覚というこのふたつの語句は、貧困に関する研究の文献で繰り返し使われています。

けれども数え切れないほど多くの研究は「女性の才覚についてあまりにバラ色の絵を描きすぎ、多くの女性にかかっている負担を無視してしまうことの危険」を指摘しています。〈やりくり〉の苦闘そのもので疲れ切っているときや、士気が下がる・助けてくれる者がいない・無力である・コントロールができないなど、貧困から生まれる感覚に圧倒されてしまったときに、すでにして枯渇していることも多い個人的資源を利用するのは、困難なことが多いものです。とくにこれがあてはまるのは、貧困に体の不調が付随している場合で、そうしたケースは頻繁にあります。

同時に、〈やりくり〉ができるということは、逆説的なことに、貧困という現実から目を逸らさせる場合もあります。かつてわたしが指導していた博士課程の学生ジャン・フラハティ（Jan Flaherty）は、女性のなかには、自分が〈やりくり〉できていることを実際には貧困ではない証拠であると考えている者がいることを発見しました。この女性たちは、貧困であるという状態を見極めることができていないわけです。とはいうものの、貧困のやりくりは不安定な家計という薄氷の上を滑るようなもので、あてにできる貯えがなければ簡単に氷を突き破ってしまいます。不安定さも貧困の重要な特徴で、これについては自分の本の第2版で詳

しく述べたいと考えています。

個人的資源が、強い社会的ネットワークから得られる社会的資源によって支えられることもあります。社会的ネットワークの強さと性質は、社会や地域によって異なり、たとえば公的な福祉体制のあり方や地域人口が安定しているかどうかといった要素に左右されます。また、時代によっても変化します。親戚や困窮した共同体にあって社会的ネットワークを維持する役割を担うのは、ここでも主として女性です。

血縁者や友人、地域住民による社会的ネットワークを通じて、感情面での支援と物質面での支援を提供しあうことができます。社会的資源を活用するのは往々にして、受け取るだけでなく、積極的に提供する行為でもあります。ネットワークはその性質にもよりますが、「脱出」、「組織化」領域に移行する助けになることもあります。また、ネットワークのおかげで非公式の仕事にありつくことができ、やりくりするための財を増やせる場合もあります。ですがここで、非公式の仕事が「反抗」する手段のひとつとなる次の領域に話題を移したいと思います。

### 「反抗」

「反抗」とは、「日常的抵抗」にあててわたしが使ってきた見出し語です。「日常的抵抗」という語を考えたのはジェームズ・C・スコットで、このときは「小作人経済」という文脈で、「相対的に力のない集団の通常の武器」に言及していました。組織だった抵抗とは違い、これは「非公式の、だいたいは陰で行われるもので、主として目の現実的利益に関心がある」のです。この抵抗の目標は、政治的变化ではなく、「生き残り、生きながらえることであるのがほとんど」です。

研究者の中には社会保障の「不正受給」を日常的抵抗と捉える人もいます。はじめわたしは納得できませんでしたが、スコットや不正受給の文献などを数多く読むうちに、すべてとは言わないまでも一部の不正受給は抵抗と見なせるかもしれないと考えるようになりました。ビル・ジョーダンは、「貧困者が、主流コミュニティの利益から排

除されたことを、ある程度まで埋め合わせ」できるものとしての「抵抗の文化」を認めています。社会保障制度に対する敵意や恨みが確かにあり、「ちょろまかしている」人々がその制度を不公平と見なしている場合、動機が生存のためであったとしても、そこには抵抗の要素が存在すると言えるでしょう。

### 「脱出」

個人の貧困の「軌跡」ないし歴史を形成するなかで、エージェンシーと構造がどう相互作用しているかということが、貧困の動的側面に関する現代理論の中心となっています。これは同じ個人を時間を追って追跡した長期的データの確立が、助けとなります。この種の調査は、貧困状態にある人々を、自身の生活における積極的なエージェントとする見方を奨励するとして、もてはやされてきました。しかし、貧困の動的側面の実証的研究は、多くが量的なものであり、非個人的なマクロレベルにおける全体像を提供しているにすぎないのです。重要ではありますが、こうした研究では、関係する個人のエージェンシーがこうした動的側面にどう反映されるかや、貧困から抜け出ための闘いの苦しさといったものへの洞察は得られません。

だからこそ、エージェンシーの理解や、エージェンシーと構造との関係といった視点から考えた場合、ミクロレベルでの研究が、長期的なマクロレベルでの貧困調査を補完するうえで、非常に重要となります。このような研究も昨今出始めていて、たとえば英国では、就労によって貧困から抜け出そうとしているひとり親を支えることに子どものエージェンシー——たとえば家事を手伝うがどの程度関わるかを明らかにしようとする研究がなされています。

当然のことながら、貧困状態にある人々が貧困から抜け出すために、あるいは子どもを貧困から抜け出すのを援助するために、どこまで戦略的なエージェンシーを行うかは、人それぞれです。個人によるこうしたエージェンシーの発揮は、利用できる個人的資源（およびその他の資源）や、社

会的・文化的環境のほか、構造的機会および直面する制約を、その人がどう受け取るかも影響しています。個人的資源などが限定され、障壁も高い場合には、戦略的なエージェンシーは相対的に弱くなります。

### 「組織化」

マクロレベルの調査では、多くの場合、貧困と剝奪にともなって、政治的活動や集団的活動の水準が、他の人々と比較して低くなることが示唆されています。このことは、「政治的なエージェンシー」の欠けた存在としての「貧困者」というイメージを助長します。ただ、組織化を制約するものと考えれば、これも無理からぬことと言えるでしょう。

わたしは特に、デイヴィッド・テイラーの存在論的アイデンティティとカテゴリー的アイデンティティの区別を用い、主体性とアイデンティティとの関連に注目したいと思います。存在論的アイデンティティとは、その人独自の自己感覚ないし存在感覚です。これは貧困の経験や〈他者化〉のプロセスで傷つけられることがあります。〈他者化〉については次の項でお話しします。カテゴリー的アイデンティティは帰属感ないし他者と同じであるという感覚のことで、集団的アイデンティティの形成を促します。相互に関連した数多くの要因が、貧困状態にある人々のあいだでの、共通したカテゴリー的アイデンティティの発達を妨げています。

第一に、「貧しい」ということは、その人の個人的アイデンティティの一部ですらないかもしれないし、ジェンダーや民族性、年齢など、アイデンティティを示す他のものと比べて顕著でないこともあるでしょう。貧困は、その人を定義する特徴というよりも、社会経済的な地位を表すもののなのです。「貧しい」というカテゴリーは、力の強い行為者（政治家、専門家、メディア、研究者）がそうみなすのですが、そのようなラベルを貼られることで、個人の主体性やアイデンティティが目立たなくなってしまうのです。ATD4th ワールドの報告に見られるように、貧しい人々は「貧しさと

いう文脈だけでみてほしくない」のです。

第二に、たとえば「貧しい」といったカテゴリーへの帰属が、かならずしも集合的なカテゴリーのアイデンティティ感覚を導くわけではないのです。これはひとつには、貧困状態にある人々が均質な集団ではないことと、多くの人が始終貧困状態から出入りしていることもその要因と言えるでしょう。

「貧しい」という集団としてのカテゴリー的アイデンティティが欠如していることは、このラベルで認識されることが本意である場合が多いことを反映しています。昨年のニューヨークタイムズ紙の記事にありましたが、「困窮している日本人の多くが後ろ指を指されることを恐れ、自分の窮状を認めたがらない」し、記事ではある女性が、「わたしたちは貧乏だと口に出せば注目を集めてしまう。だからできるだけ隠したい」と語った言葉が引用されていました。同様に、スコットランドで働くインド出身のコミュニティーワーカーは、「立ち上がって『私は貧しい。私はほかの貧しい人たちとともに自分の権利のために闘う』と言う者は一人もいなかった。貧しいことに対して恥ずかしいという感覚があった」と語りました。対照的に、「ゲイや身体障がいなどの集団は……誇りをもって集まり、互いを認めあっていた」と書かれています。こういった集団(ないし少なくともメンバーの一部)は、ネガティブな生得的アイデンティティを肯定的なカテゴリー的アイデンティティに変換し、自分たちの差違を政治的に承認させる基礎としていました。

このタイプの変換は、貧困状態にある人々に初めから開かれているわけではないし、大多数は、好んで貧しくなろうとは思わないでしょう。「貧しい」という語句は、社会的にスティグマを付与された、物質的資源の「欠如」を表しています。この種の欠如は、アイデンティティ共有の確固とした基礎にはなりません。「貧しいことへの誇り」という旗印の下に行進する者は多くはないでしょう。ですから貧困が、それに苦しんでいる者にとって、連続性のあるカテゴリー的なアイデンティ

ティを構成するようにはとても思えないのは当然なのです。集団的な行動は、共通するアイデンティティがなければ困難です。

しかし、他のカテゴリー的アイデンティティには、母親(シングルマザー)、高齢者、地域住民などで、集団的行動の基礎を提供しうるものもあります。どのようなカテゴリー的アイデンティティを用いるにしても、集団として組織されることに對する制約は甚大で、必要な資源が不足していることと、制度的な障壁が壁になります。しかし驚くべきことに、貧困状態にある人々(特に女性たち)のなかにも、ある程度まで制約や障壁を乗り越え、かならずしも「貧困の旗の下に」ではないが、〈組織化〉して、変化をもたらしようとしている人たちがいます。それは集団的自助(「やりくり」のより組織化された形)の活動であったり、もっと直接的な政治行動であったり、またそのふたつが重複したものであったりします。

## 言 説

### 他者化

「貧困者」であることを共通のアイデンティティと見るのが躊躇されるのは、かなりの部分、「非貧困者」が「貧困者」について語る語り口に左右されています。ここからわたしたちは、「貧困者」を〈他者<sup>アザール</sup>〉とする言説の力一言語やイメージを通して明確化される像一を考えなければなりません。〈他者〉という考え方を、ここでは「貧困者」がさまざまな面で社会の他の成員と違った扱われ方をする際の、その扱われ方を意味して用います。〈他者化<sup>アザリシグ</sup>〉という考え方は、これが固有の状態ではなく、「非貧困者」が動かしている、進行中のプロセスであることを伝えています。

これは差異化と境界決定の二元的なプロセスであって、これによって「我ら」と「彼ら」の間に線が引かれ、そのことを通して社会的な距離が確立され、維持されていきます。両者の間の線には、ネガティブな価値判断が染みついており、その価値判断が「貧困者」のことを、道徳汚染の根元、脅威、「救済に値しない」経済的お荷物、哀れみの

対象、果ては外来種など、さまざまなものとして構築していくのです。この境界線は、「我ら」をひとつの属性にまとめ、わたしたちが受けている恩恵を正当化する一方で、「彼ら」には複雑な人間性と主体性を認めず、彼らが収奪されること、加えて、貧困を引き起こす社会経済的不平等を正当化します。この二元的プロセスは、ステレオタイプ化やスティグマ付与といった関連する社会的プロセスにともない、またそれによって強化されています。

〈他者化〉は、「貧困者」に対する「非貧困者」の考え方・語り方・行動の仕方を、個人間のレベルと制度的なレベルの両方で形成する、形の見えにくい実践として理解することができます。他者が「自身を名づけ、定義する権利」を否定するということもあります。概して「貧困者」を表現するために使われる言語やラベルは、「貧困者」より力のある「非貧困者」によって口にされ、文字にされてきました。オーストラリアの貧困について示唆に富む研究をまとめたマーク・ピールが指摘しているように、「あたかも貧しい人々は人間一般の一部になりきれていないかのようだ。ほかの人々は常に彼らを押し出そうとしたがる。つまりところ貧しい人々には、どこか決定的におかしな部分があるに違いないということか―負け犬、福祉をあてにして遊び暮らす人、物の数に入らない―など、人品卑しからぬまっとうな市民の中にも、このような言葉を使ってはばからない人がいる。貧しい人々にこれほど容赦のない態度をとれるということは、彼らを自分とはどこかしら非常に根源的な部分で異なった存在と見なしているとしか考えられない」。

貧困状態にある人々を表現するのに用いられる言説は、歴史に根ざしています。イギリスで使われるうち、誰が見ても侮辱的な物言いの最たる例が、「アンダークラス」と「福祉依存」です。特に現在では、「福祉に依存する人たち」という言い方が支配的になっています。

これほどまでに手あかはついていないものの、「貧しい (poor)」という語も、すでに簡単に触れ

たように、問題をはらんでいます。この単語は「我ら」が「彼ら」を表現するのに使う形容詞であって、貧困状態にある人々自身はこのような後ろめたさを伴う修飾語を自分たちのこととしては使いたがりません。「貧しい」にも「質的に落ちる (poor)」のように一段下がった含意があるからです。また普通、貧困状態にある人々に向かって、あなたたちはどう呼ばれたいですかと尋ねることもありません。

貧困に関する支配的言動の問題は、メディアの用いる表現により強化されます。メディアは貧困状態にある人々を、えてして「我らのなかのよそ者」(カッツの表現を借用)であるかのように描きます。時には、わたしが「同情的なく他者化」と名づけた表現になります。一例として、英国のテレビニュースでホームレスがどのように描かれているかを分析したところ、ホームレスの人々は「哀れでみじめな類例として取り上げられ……ジャーナリストが考える一般受けのする生い立ちを語るように促される」ことが示されています。ところが別の研究によると、貧困状態にない人々は、「同情に満ちた言葉やイメージによって、苦しみに対して無力な気持ちを掻き立てられてしまう」ことも示唆されています。この研究に携わった人たちは、「憐憫を基にしたイメージ化や議論では、見聞きする人は自分を同情の対象から遠ざけたくなり、貧しい人々を『他者』と見ることを促す」恐れがあると警鐘を鳴らしています。

一般に、「貧困者」の他者化とは、よくて貧しい人々が「非貧困者」の憐れみや無関心の対象となること、悪ければ恐れや侮蔑、憎悪の対象となること、つまり「支援されるか罰せられる、無視されるか研究対象となる」(再びカッツの引用)ことはあっても、権利を持った対等な市民として扱われることがめったにないということです。

その結果、貧困状態にある人々は、しばしば、スティグマを付与され、貶められ、面目を失われているように感じます。これは子どもや若い人たちにはとりわけ苛酷で、子どもからじかに話を聞いた調査によってもそれが明らかになっていま

す。ある研究には、貧困地域に暮らす子どもの貧困の議論はすべて「スティグマと恥辱という糸で織り上げられている」と記されています。また、貧困を示す重要なものとして、子どもや若い人たちには服装がとりわけ重要な役割を果たすことを強調している研究も数多くあります。テス・リッジは、子どもがある集団の仲間に入とうまくやっていくためには、適切でファッショナブルな衣服を着ていることが決定的に重要であることを示しています。

貧困に伴う恥辱の感覚は、アイデンティティや自尊心、自己評価を痛いほどに傷つけ、健康をも損ないます。イギリス反貧困連合（UKCAP）のワークショップのある参加者は、その感覚を次のように描いています。「自分がタマネギになったよ

うで、少しずつ、全部の皮が剥がされて、最後には何も残らなくなる。自分自身についての評価と感覚がすべてなくなってしまう—自分がなんの値打ちもないように思えてきて、やがて家族もそんな風に感じるようになる」。

これに対し、当事者参加型の研究や反貧困の活動では、こうした負のイメージの伴う言説が否定され、代わりに貧困状態にある人々を尊重・敬意をもって対等に遇する新たな表現がどんどん伝えられ、広がりを見せています。希望の持てるこの報告をもって本日の講義を終え、「抵抗の言説」について、明日さらにお話したいと思います。

（訳：屋代通子：NPO 法人 CAN）